

論文

オンライン授業における 大学生の学習環境デザイン

岩崎 裕月 栗原 拓海 中村 雅子

本研究はオンライン授業における大学生の主体的な学習環境の構築を明らかにすることを目的とした。学習への取り組み、コミュニケーション、独自の工夫の3つに焦点を当て大学生19名（うち院生1名含む）に半構造化インタビューを行った。2020年度のオンライン授業化で課題が増加して、授業中に他の授業の課題をする学生が増加していた。学生間の交流の機会は予想通り減少傾向にあるが、そのこと自体は授業内容の理解度に影響するとは意識されていなかった。ただし受講のモチベーションには負の影響を与えていた。また各学生とも試行錯誤しながら授業を受けやすいよう自宅の環境を整えようとしていることが明らかになった。

キーワード：オンライン授業、eラーニング、学習環境デザイン、大学生、受講環境

1 問題意識

2020年にはCovid-19の感染拡大により、全国の大学でオンライン授業が導入された。内閣府が2020年5月25日～6月5日に行った調査^(注1)によると、大学生・大学院生の95.4%がオンライン授業を受講しており、75.6%の学生が教育・学習環境の重要性を意識するようになったと回答している。従来の対面授業とオンライン授業では授業形式も、必要な準備も異なっている。そのような状況の変化の中で、大学生の授業に対する態度や対処方法にはどのような変化があるのか、また大学生が自らの学習の環境を整えるためにどのような工夫をしているのかを調査し明らかにしたいと考えた。

2 先行研究

学校教育などのフォーマルな学習（山内・山田編、2016）においては、学習者の学びについて、大きく分けると2つの観点からの研究がある。教授する側から見た「教育のデザイン」と学習者からみた「学習環境のデザイン」の観点である。先行研究の蓄積から言えば前者が圧倒的に多いが、後者についても活動理論やそこから生まれた状況的学習論（レイブ・ウェンガー、1991=1993）に依拠する一連の研究が90年代から注目を集めてきた。レイブらの著書で紹介されている研究例

では、仕立て屋や産婆のような伝統的な徒弟制に基づく事例が多かったこともあってその含意が誤解されることもあったが、この観点に基づいてフォーマル学習である学校教育について分析する研究も少なくない。また学校や企業のようなフォーマルな組織においても、フォーマル学習とインフォーマル学習が並行して重層的に生じていることも指摘されている（山内・山田編、2016）。

近年では、二一世紀スキルの提唱や文部科学省の新学習指導要領で「主体的・対話的で深い学び（「アクティブ・ラーニング」）」が強調されたこともあって、学習者の主体的なあり方への注目が高まっている。

しかし大学生を対象とした学びの研究という意味では、特定の授業デザインの効果や、新たなツールの導入の効果についての研究は多いものの、学習者自身が学びのためにどのような方略をとって授業に対処しているのかというデータについては、定型的な実態調査を超えるような実証的研究は少なかった。

その中で、筆者らは柳町（2006）が行った研究に注目した。柳町（2006）は、フランス語入門クラスの授業に受講生として参加し参与観察の手法で調査を行った。柳町はこの授業の中で、周囲のクラスメート一人一人を学習のそれぞれの側面で頼ることができるリソースとみなし、様々な局面でそれらのリソースにアクセスすることで自己の学習をデザインしていた。また、このような社会的環境の意識化だけでなく、学期の進行とともに受講者が減り周囲のスペースに余裕ができた時に、周囲の可動式の椅子を引き寄せ、それらに教科書、ノート、単語リスト、プリントなどを半円形に配置し、授業を受ける中で複数の情報に素早くアクセスできるよう

IWAZAKI Yuzuki

東京都市大学メディア情報学部社会メディア学科 2020年度4年生
KURIHARA Takumi

東京都市大学メディア情報学部社会メディア学科 2020年度4年生
NAKAMURA Masako

東京都市大学メディア情報学部社会メディア学科教授

工夫するようになった。このように、教室における学習では、人や人工物を巻き込んだネットワークが常に構築、再構築されている。また、逆にこのような知識や情報へのアクセスを容易にする学習環境のデザインが、学習者が教室という実践へのコミュニティへの参加を支援しているということができる。

また、谷口^(注2)は学習者間のコミュニケーションの違いについて述べている。谷口によれば、従来の日常の「ダベリ」の時間には同時進行でいくつもの会話が起これ、これがふと話しかけるようなコミュニケーションを支え、人間関係の構築に貢献している。しかし、オンラインでは合目的的に「この時間にこの話をする」と設定して何かを伝えようとするために、雑談や立ち話といったコミュニケーションができないという。

実際には休憩時間だけでなく、授業時間中にも「私語」という形でローカルなコミュニケーションがいくつも並行して生まれていることが多い。その多くは授業と関係がない会話で、授業の理解を妨げるものかも知れないが、他方で、今しがた聞いた講師の説明で、手を上げて質問するほどでもない不明な点や聞き逃した点を隣の友人に確認したり、説明から思いついたアイデアを語り合ったりするような、授業理解を促進する会話もある。しかしオンライン授業ではこのようなインフォーマルな横のコミュニケーションの機会も失われる。

本研究では対面授業からオンライン授業へという大きな変化の中で、学習者としての大学生がどのように対処したのかを質的なインタビューを基に明らかにすることで、学習者の視点に立った学びのデザインを考える一助とすることを目指した。

3 目的

従来の対面授業とオンライン授業とを比較し、学習者のオンライン授業での工夫や取り組み方を明らかにする。

大学生は、小・中・高校生とは異なり、幅広い専門分野が存在し、自分で履修選択ができるなど、学習についての自身の選択の余地が相対的に大きいため、様々な要因でオンライン授業への取り組み方や工夫が変化すると考えられる。

今回は特に以下の3点について検証課題とした。

(1) 学習態度の変化

対面授業とオンライン授業では受講形式が異なっているため、質問の方法や課題の分量なども異なっている。そのため、質問のしやすさやサボり方・頻度、授業への緊張感、予復習時間といった点に変化が生じると予想した。

(2) 学習者間のコミュニケーション

オンライン授業の方が、授業前後や授業内で友達と授業のことを話す機会が少ないため、内容の理解が深まりづらいのではないかと。そのためコミュニケーションの不足を補うために、SNSなど他の方法で情報交換をより頻繁に行うと考えられる。また、2020年に大学に入学した1年生は、まだ対人関係が構築できておらず、友人がいない（できない）ため、オンライン授業を好まないと考えられる。

授業形式の中では、とくにグループワークで学生同士のコミュニケーションがうまくいかず、活動の質が低下するのではないかと予想した。

(3) 学習のための主体的な工夫

オンライン授業では、PC、Wi-Fiなどの情報環境や受講場所などを自身で整備する必要がある。筆者らはオンラインでの研修に必要な環境整備についての志村^(注3)のリストを参考に、情報機器やソフトだけでなく、講義に集中できる自宅の物理的環境や、同居人がいる場合にはその理解と協力のような社会的環境も重要であることを確認した。

受講生自身が整えた受講環境は、教室での授業以上に学生ごとに多様性が高いと予想される。そこに見られる各自の工夫を明らかにする。また、オンライン授業では、始業のチャイムや通学時間のような日常と受講の区切りとなる要素がないが、授業に向けて気持ちを切り替えるための行動でも、それぞれの工夫が見られるのではないかと考えた。

4 方法

大学生・大学院生を対象とした1対1の半構造化インタビューを行った。数名の学生に予備インタビューを行い、その内容を踏まえて検証課題・質問項目の追加・修正を行った上で、本インタビューを実施した。インタビュー対象者は主に岩崎・栗原からの個人的なつながりで依頼したが、大学・学部・学年・性別などができる限り多様になるように協力者を探した。

主な質問内容は、対面授業とオンライン授業を比較した場合の、授業の受けやすさ、内容の理解度や質問のしやすさ、授業へのモチベーションの度合い、緊張感や疲労感、学生同士の授業内外のコミュニケーション、授業のサボり方やその内容などの違いである。さらにオンライン授業に際してのPCや通信環境の整備、それら以外に受講に際して行っている工夫があるかなども質問した。

5 結果

5.1 調査概要

2020年7月から11月の期間に、大学生（大学院生

表1 本インタビュー協力者一覧

取材日時	時間	年齢	性別	学部・専門分野	学年
7月15日	30分	19	女性	生産デザイン	2年
7月31日	29分	20	女性	環境学	2年
8月1日	36分	21	女性	経済学	4年
8月9日	34分	20	男性	社会福祉学	3年
8月15日	47分	20	男性	生命科学	2年
8月23日	55分	22	男性	法学	4年
8月23日	25分	22	女性	環境学	4年
9月3日	30分	21	男性	保健科学	4年
9月6日	59分	19	男性	理工学	1年
9月12日	59分	20	女性	国際観光学	2年
9月15日	27分	20	男性	工学	2年
9月24日	40分	22	女性	看護学	4年
9月24日	35分	19	男性	経営学	1年
10月20日	65分	19	男性	法学	1年
10月27日	100分	22	男性	総合システム工学	2年
11月7日	46分	20	男性	理工学	2年
11月8日	53分	21	男性	メディア情報学	3年
11月15日	33分	23	女性	環境情報学	M1
11月19日	33分	21	女性	環境学	3年

1名含む)を対象に本インタビューとして19名に半構造化インタビューを実施した。18名はZoomやWebexなどのWeb会議システムを用いてオンラインでインタビューを行い、1名のみ対面でインタビューを行った。

回答者の性別の内訳は男性11名、女性8名、学年の内訳は1年3名、2年7名、3年3名、4年5名、大学院1年1名となっている。インタビュー所要時間は平均44分である。回答者の学部・専門分野は、理工学、生命科学などの理系の学部やメディア情報学、環境学のような文理複合・融合学部、さらに法学や国際観光学のような社会系の学部などで大学も10校以上にわたっている(表1)。

5. 2 調査結果

(1) 学習への取り組みの変化

①課題量・勉強時間

半数以上の学生は、授業ごとに出される課題の量が対面授業時よりも増加しており、課題の増加に伴い勉強時間も対面授業時と比較して増加していた。また、対面授業の時に実験やフィールドワークを実施していた授業では、授業内容を補完するために、代替として課題が増やされていた。

何か例えば、通学時にあった課題の量、家でやる課題の量はまあ1だとしたら、オンライン授業になってからはホントに5みたいな、ホントに5倍くらい。(男性 社会福祉学部 3年)

課題の過重な負担については、学生の声を反映して授業期間中に改善した例もあった。

なんか途中でアンケートみたいなのがあって、そこでみんなでクレームをいれてましたね。(笑) (男性 理工学部 1年)

演習・実習がオンライン授業に代替することには、特に不満が多かった。

実習がオンラインになるっていうのは、やっぱりちょっと、んー(笑) 致し方がない部分があるかもしれないんですけど、まあちょっとと思いますね。動画だけで見てさらにそれで実習レポートで考察を書くっていうのがちょっとなかなか難しくくて、自分でやっていないので。(男性 生命科学部 2年)

一方、高学年、特に4年生では、対面授業と比較して1授業あたりの課題量が増加しても、課題量に対する不満を感じている学生は少なかった。

また4年生や医療系などの専門性の高い学部の学生は、課題量が変わらない場合、あるいは減少している場合でも勉強時間は増加していた。4年生は卒業研究、医療系学部生などは資格取得のための勉強に取り組んでいることが理由であった。特に、医療系学部の学生は授業がオンライン化したからというよりは、資格を取得しなければ卒業・就職できないため、資格勉強に費やすために勉強時間がより増加したと語っていた。中でも医療系学部でかつ4年生である2名は、国家試験が勉強時間が増加した理由としている。

②受講態度

ビデオオフの授業を受講している学生とオンデマンド型授業を受講している学生の大半が、オンラインのほうが対面授業よりもサボりやすいと回答した。また、ビデオがオンとオフの授業の両方を受講している学生は、ビデオがオフの場合に限ってオンライン授業の方がサボりやすいと回答した。

オンライン受講時のサボり方としては、対面授業と比較して他授業の課題をする学生が多く、スマートフォン(以下、スマホ)をいじるという学生は対面授業に比べて少なくなっていた。また、対面授業では授業自体に参加しないことがあるという学生がいたが、オンライン授業ではいなかった。このため授業の出席率自体はオンライン授業のほうが高い傾向にある。

ただし、オンデマンド型授業を受講している学生の中で、対面授業では授業に出席しないというサボり方をしたことの無い学生でも、配布された授業動画を視聴しないで課題のみ提出することがあるという例があった。

一方で、対面授業の方がサボりやすいという学生も数名いた。理由として「オンライン授業だと見つめられているかわからないのでサボりにくい」、「対面だと他の者の陰に隠れられるが、オンラインだと先生にも学生にも

見られているのが緊張する」など、周囲の目を気にする意見が見られた。このような回答をした学生は、オンライン授業で常にビデオをオンにする必要のある授業のみを受講していた。

③質問

質問にリアルタイムチャットやボイスチャットを使用していた授業の受講者では、対面授業よりも質問頻度が増加しており、質問しやすいと感じている学生が多かった。そのように感じる理由として、リアルタイムチャットを使用していた学生は他の学生に質問していることが知られない」という「匿名性」と、授業時間内に分からない部分を解決できる「即時性」を挙げていた。またボイスチャットを使用していた学生は、「(対面で大きな教室だと後ろの方からは遠くて質問しにくい、オンラインだと)教授との距離に関係なく質問できる点が良い」という理由を挙げていた。

オンデマンド型授業や授業後に別な時間を取って質問をする形式の場合は、対面授業の方が質問しやすいと感じていた。ある学生はメールで質問をしたが、メールへの返信がないまま約2ヶ月放置されてしまい、聞きたいことが聞けなかったという経験を理由として挙げている。

オンラインの時は、授業でちょっと学校行けてたからその時に「分からないところあったらメールしてもいいですか？」って聞いたんですけど、結局そのメールもまだ(返事が)返ってきてなくて(笑)。(女性 看護学部 4年)

うーん、どうだろうな(8秒ほど考えて)。でも個人的には対面ですかね。授業が終わった後に先生の所に行くっていうのが一番しやすいと思うんで。(男性 理工学部 2年)

④緊張感・抵抗感、疲労感

インタビューした大半の学生がオンライン授業開始当初、緊張感や抵抗感を感じていた。その理由として、「ソフトの使い方が分からない」など、慣れない機器操作についての戸惑いが多く見られた。一方、ほぼ毎日、ゲーム仲間等とDiscordでオンライン通話をしており、オンライン・コミュニケーションには慣れていると思われた2名の学生も、やはりオンライン授業に対して緊張感を感じていた。

多くの学生はオンライン授業の経験が増してきた7月頃には抵抗感などはなくなっていた。ただし、1年生の中には「友人ができていない」という理由で9月時点でも抵抗感を感じている学生もいた。

(オンライン授業に抵抗感があるかという質問に対して)

O: えっとまあ、自分の場合1回生ってことで知ってる人がいなかったの。

Y (インタビュアー): あー、それは確かにキツイですね。

O: はい、それで基礎演習とかだと知らない人とグループ組まされたりっていうので、最初は戸惑ったりとかありましたね。まあZoomの使い方にも慣れてなかったの。

Y: あー、なるほど。今はまだそういった抵抗感とかあったりします?

O: まあ今でもやっぱりありますかね。(男性 経営学部 1年)

一方で、オンライン授業に対して最初から緊張感などを感じていない学生も1名いた。この学生には長期インターンシップでオンライン会議の経験があった。

このような例外もあるが、ほとんどの学生は、対面授業よりもオンライン授業でより疲労感を感じていた。その理由として、「ビデオがオンになっている時に、自分の姿が常にフォーカスされており、他者からいつ見られるか分からないので気を張っている」といった意見が多かった。

(対面授業とオンライン授業でどちらが疲れやすいかという質問に対して)

H: ええー、難しいな。でもなんか、確かにZoomの方が寝れないっていうのは思った。寝ちゃいけないなって。

Y: あ、そうなんだ。なんで?

H: なんかさ、ビデオついてる時だけね。ビデオついてるとさ、教室だったら自分にフォーカスあたってないけどさ、めっちゃ自分映ってるじゃん。

Y: あー、確かにね。

H: だからもう、絶対分かるっていうか、先生とかはパソコンでやってるから全員見れてる訳だしさ。あんなにいっぱい全員見れることないじゃん、対面だと。

(女性 経済学部 4年)

このように、いつ誰に見られているか分からない状況をパノプティコンと表現する学生もいた。

A: 疲労感は、オンラインの方があかな個人的には。

Y: へー、どんなところで疲れんの?

A: なんだろう、それこそさっき言ったけどパノプティコンじゃないけどさ。いつ見られてるか分かんないし、こう友達が隣にいてすぐ相談できるわけでもないしさ。

Y: あー、なるほど。

A: 何かあれちょっと分かんないとかあったら、隣にいたら聞けるけどいいから、聞けないから、神経結構ずっと使ってるのかな。そんな感じで多分疲れれるんだと思う。

(男性 法学部 4年)

この回答からは、対面授業では、会話をしないまでも近くに友人がいれば、多少気を緩めていても助け合えるという意味で、互いに受講をサポートしていたことがわかる。オンライン授業では、このような無意識の相互サポートがなく、常に自分の責任で意識の集中を維持しなければならないことが緊張感や疲労感につながっている面があると考えられる。

また、オンデマンド型授業を受講している学生では、「画面に集中して授業動画を見続けるため疲れる」「授業動画をずっと聞いているだけなので退屈で疲れる」など、長時間、変化なく視聴し続けることによる疲労が見られた。

対面授業の方が疲労を感じるという学生は少数だった。対面の方が疲れる理由としては「対面授業の方が授業を集中して聞き、ノートを取る」といった授業内での疲労に加え、「登下校が長くて疲れる」という移動による疲労が挙げられていた。

まとめると、オンライン授業の中でもビデオオンのリアルタイム授業、ビデオオフのリアルタイム授業、オンデマンド型授業で疲労度が異なっており、ビデオオンの授業に疲労度を感じている学生が最も多かった。

⑤受講のモチベーションと専門分野による違い

多くの回答者は、オンライン授業になって受講のモチベーションが低下していた。しかし、医療系や芸術系学部といった専門性の明確な学部の学生や、下の2名の回答者のように学習内容に対して意欲がもともと高い学生は、モチベーションを保って資格などの勉強に取り組む傾向があった。

モチベーションですか。うーん、好きなことだと勝手にモチベーション上がっちゃうんで。特にまあ、（意識して維持・向しようとする）ことはなかった）（男性 工学部 2年）

まあ、どっちもどっちなんですけど、まあ対面は対面でやっぱり教授がしっかり説明してくれているのでまあ、みんなも結構静かな場なんでモチベーション維持できると思うんですけど、オンラインも自分で課題に取り組むっていう点では、自分がしっかり理解できるまでできるっていうのがやっぱりモチベーションの維持はできるかなって思います。オンラインでも、はい。（男性 生命科学部 2年）

すでに必要な単位は取得済みなのだが、友人と会うために授業を履修していたという学生もあり、その授業がオンライン授業になって友人と会う機会がなくなったため履修意欲がでないという回答もあった。

(2) 学習者間のコミュニケーション

多くの学生は対面授業に比べてオンライン授業では、学習者間のコミュニケーションが減った、あるいは変わらなかったと回答していて、増えたという回答は1名のみだった。減った理由としては、多くの学生が「他の学生と連絡をする敷居が上がった」「授業終了後に話せなくなった」という理由を挙げている。

谷口が指摘したように、授業前後に生まれるインフォーマルで偶発的なコミュニケーションが重要だったことがうかがわれる。

学生同士で連絡を取る際はLINEが最も多く、その中でもチャットと通話が双方使われている。次いでZoom利用者が多く、対面で話したという学生は1名だけだった。オンライン授業で新しい学生との関わりが増えたのは2名だけで、多くの学生はオンライン授業を通じて対人関係に変化は生じなかった。

授業の理解度についても、オンライン授業によって低下することが危惧されているが、そのように回答した学生はいなかった。不明点の確認などの対策としては友人に気軽に聞けなくなった分、「自分で調べて補った」という学生もいた。

ただしグループワークについては、問題点を指摘する学生が多かった。（ブレイクアウトルームの活用や自動振り分けで）グループ分け自体の効率は良いが、グループワークで発言をするのが難しいという学生が大半であった。その理由として、「話し始めのタイミングが掴み辛く会話が始まらない」、「話していても発言が被ってしまい両者が黙ってしまって会話が弾まない」、「ソフトの扱いに慣れていないと操作で時間がかかってしまう」といったことが挙げられた。

このためグループワークについては、大半の学生が対面の方がやりやすいと評価していた。話し合いが上手く進まないとストレスに感じてしまい余計にやりづらくなってしまうというのが大きな理由である。また、そのことを授業担当教員にフィードバックしたことによって、2, 3回目の授業からグループワークがなくなったという事例もあった。

自分だけで受講するよりも友人とコミュニケーションを取りながら取り組む方が授業へのモチベーションが高まる。オンラインでは対面ほど気軽に会話をしたり、その場で案を出したりするのが難しい。

下記の回答者は、対面での学習者間のコミュニケーションがモチベーションに関わることを端的に述べている。

対面のほうがやっぱり、友達とか支えてくれる人っていっぱいいるのかな、お手伝い、一緒にやってくれる人が多いので、やっぱり質問とかしたりし返したり、その場で解決できることが多いので、対面の方が友達と一緒にやるってことはモチベーシ

ンを保ちやすいのかなって思います。(女性 環境学部 4年)

オンラインになったことによって話す相手は限られてしまっている。新しい人との出会いや交流が少ないので、1年生では友達を作ることが難しく、学習者間のコミュニケーションが取れないという学生もいた。

(3) 学習のための主体的な工夫

①受講のための環境の整備

回答者全員が、PC に対する興味やこだわりの度合いに関係なく、インタビュー時点でパソコンと Wi-Fi による通信環境を整備していた。パソコンはほとんどの学生が入学時に購入しており、Wi-Fi も一人暮らし、実家暮らしを問わず導入されていた。スマホ利用にも欠かせないためと考えられる。

また通信・情報環境だけでなく、家の中のどこで受講するかや、部屋の中の配置についても、独自の工夫をしている例が見られた。例えば図1を描いた回答者は、オンライン授業になってから部屋の模様替えをし、ベッドを受講する机から離れた位置に変更した。また、机の上には六法全書や電子辞書が置いてあり、授業で分からないことがあったらすぐに調べることができるようにしている。自分なりに授業を受ける空間と休息の空間を分けることでメリハリをつけようとしている。

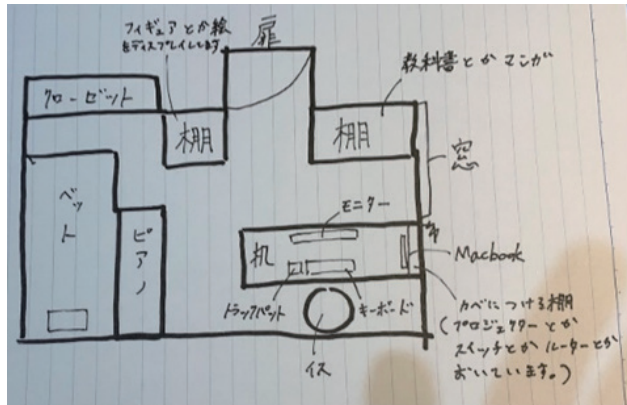


図1 部屋の見取り図1 (回答者の許可を得て掲載)

T (インタビュアー): ベッド行くのめんどくさくないですか?

R: これ、わざとやってるんですよ。

T: ほう。

R: ベッドは休むところって決めて、机は授業を受けたり動画を見るところって決めてます。

今までベッドとピアノが逆だったので、ベッドにアクセスしやすい風になっちゃって結局勉強しないっていう感じだったので、そこをちょっと切り替えようって感じで変えました。

(男性 法学部 1年)

さらに、図2のように壁を背にした場所で受講する

ことで、ビデオオンの時に部屋に干した洗濯物など授業とは関係ない私的なものが映らないようにしていた回答者もいた。

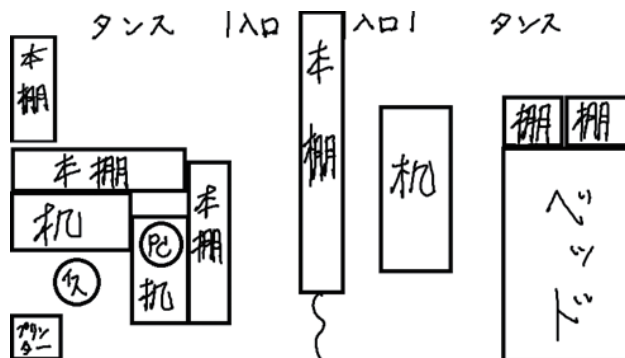


図2 部屋の見取り図2 (作成者の許可を得て掲載)

同様に、オンライン授業になって部屋の配置を変更したり、ビデオのオンオフによって受講のために座る向きや場所を変えろといった工夫をしている学生が数名いた。

「元々購入していたスマホスタンドを、受講でサブ画面としてスマホを使う際に活用する」、「画面サイズが大きいモニターを活用してマルチタスクをしやすくする」というように、もともと持っていた物をオンライン授業に活用するといった事例も見られた。

(授業を集中して受けるために工夫をしたことについて)

F: あー、うーんまあ強いて言うなら、モニターが人よりちょっと大きめで良かったなっていうのはありますか。

Y: え、どれくらいの大きさなんですか?

F: えーとなんだっけな、何インチだっけな。えっと、21とかだっけな。詳しくは覚えてないんですけど、ゲームとかで最大サイズにするときは(解像度が)2000いくつ×1300みたいな、フルスクリーンにすると。

Y: おお、結構でかいですね。

F: まあ基本フルスクリーンはないですけど(笑)。それだから、リアルタイム授業でも先生の画面と資料とで色々開きやすいですね。(男性 理工学部 2年)

これらの事例で見られたように、学習のための多様なリソースを身の回りに集めて使いやすく配置することは、教室の限られたスペースでは難しく、自宅からのオンライン授業ならではのこともできる。柳町(2006)がノートや辞書、教科書などを周囲の椅子に広げて受講した記述を彷彿とさせる事例である。

②気持ちの切り替え

オンライン授業の際に気持ちを切り替えるために、化粧をする、服を着替えるなど身だしなみを整える学生が多数いた。

(気持ちを切り替えるための行動についての質問に対して)

O: まず, まあ服を着替えるですかね。

Y: なるほど, それは確かに大事ですね。

O: 上だけでもとりあえず, 人に見せられるようにしないと, まあそれくらいですかね。 (男性 経営学部 1年)

また「コーヒーなどの飲み物を飲む」, 「授業に関係ない物を机から片付ける」など, 特別意識せずに行っていることだが受講前にしていることがあるという学生もいた。さらに, マイクオフで受講する場合でも, テレビの電源は消しておくという学生もいた(受講するとき以外は, 通常はテレビをつけっぱなしにしておく)。

オンデマンド型授業の受講生でのみ見られたケースだが, 家だとやる気が出ないためファミリーレストランやカフェといった自宅外で受講しているという学生もいた。

6 考察

6.1 学習への取り組みの変化

①課題量・勉強時間

課題量が増加したのは, 演習やフィールドワーク, テストの実施が難しいことが理由だと考えられる。

低学年の学生では課題量を負担に感じる者が多かった一方で, 高学年の学生は卒業のための単位をすでにある程度取得していて低学年よりも履修する科目数が少ないためか, 1 授業あたりの課題量が増えても不満を感じている学生が少なかった。中でも 4 年生は今回インタビューした学生に限って言えば課題量について不満を感じている者はいなかった。

一方で, 4 年生は卒業研究, 医療系学部などは資格取得の勉強に充てる時間が増加したため, 課題量に関わらず勉強時間が増えていた。これはオンライン授業かどうかとは関わりなく, 学年進行による変化と考えられる。

②受講態度

授業への出席率は, 対面のときよりもむしろ上がっている。今回の回答者の半数近くが自宅から大学までの通学時間が約 1 時間で, 中には 2 時間を超える学生もいた。対面時よりも通学時間分の余裕ができたために出席しやすくなったと考えられる。

受講時にサボる内容として, 他の授業の課題をするようになった学生が見られたが, 課題全体の量が増え, 以前なら授業中にスマホをいじっていた時間などに, 課題の消化が充てられたのではないかと。

対面授業の時には授業を休むというサボり方をしなかった学生が, オンデマンド型授業では授業動画を視聴しない=授業に参加しないことがあると答えた。オンデマンド型では, サボることのハードルが低くなったと考

えられる。

③質問

オンライン授業での質問の利点として, 質問の匿名性や回答の即時性, 距離に関係なく質問できるという点が挙げられていた。リアルタイムチャットやボイスチャット以外の質問方法では, 返答までに時間がかかったり, 質問に気付かれず返答がもらえなかったりしたことで質問をしなくなってしまうていた。特にオンデマンド型授業ではこれが顕著に見られた。より多くの学生が質問をしやすくなるには, 早く, 確実な返信が得られる質問方法を取り入れることが必要だと考えられる。

④緊張感・抵抗感, 疲労感

多くの学生は, 対面授業と比較して, オンライン授業に対して, より緊張感や疲労感を感じていた。対面であれば個々の学生が目立たない大教室のような状況でも, オンライン授業ではビデオオンの場合, 全員がフォーカスされていると感じる。そのことが緊張感や疲労感につながっている。

授業以外でオンラインでのコミュニケーションに慣れている学生でも, オンライン授業に対して当初は緊張感を感じていた。このことから, 一般的なオンライン通話の利用経験は, 必ずしもオンライン授業に対する緊張感とは関係がないことが分かる。

1 年生は緊張感が強く, またそれが継続している傾向が見られた。1 年生では, 新型コロナウイルス感染症の影響で, インタビュー時点までに 1 度も大学に行けていない状態が珍しくない。例年行われる対面のオリエンテーションなどの 1 年生同士の交流の場も設けられなかった。そのため友人関係の構築が難しく, 9 月になっても授業で知り合いがおらず, 学生同士の情報共有ができない例もあった。このような状況が原因となって, 1 年生は他学年よりも長期間にわたってオンライン授業に対する緊張感や抵抗感が高かったと考えられる。

⑤受講のモチベーションと専門分野による違い

医療系学部などの専門性の高い学部は, 卒業要件として資格取得が必須となることが多い。またデザイン系を専門とする回答者は, 演習を自宅で行うことになっても, 好きなことなので, とくにモチベーションの低下を感じないといっていた。なお, この学生はオンラインで作品の相互評価の会を行うようになったため, むしろ学生同士のコミュニケーションは増えたとしている。また, 4 年の学生の多くは学部と問わず, 卒業研究に取り組む必要がある。

これらのことから, 大学での学びで, やるべきことが明確である場合, もともと学習への意欲が高い場合に

は、オンライン授業でもモチベーションを保つことができています。

6.2 学習者間のコミュニケーション

ほとんどの学生が友人との情報交換が減ったと答えている。それによって従来なら友人に聞いていただろう授業についての疑問点を自分で調べることが増えていた。学生の中にはオンラインの方が自分で調べることが多く内容が身に付きやすいといった意見もあった。このことから、友人との関わりの減少が授業の理解度に負の影響を与えるとは限らないということが分かった。

ただしグループワークについては、オンラインではやりにくいという学生が多かった。ファシリテーターやティーチング・アシスタント (TA) といったコミュニケーションのサポート役がいると議論が進みやすくなると考えられる。もしそれが難しい場合でも、講師がグループの中での役割分担を明確にするなど、進行サポートをすることが円滑なグループワークのために求められる。

受講のモチベーションについては、友人と関わる機会が少ないことで低下するという意見が多かった。大学に行くという行為自体がモチベーションの維持につながるといった意見もあった。このように、友人との関わりや受講する場所という社会的環境の構築・維持がモチベーションにとって重要だと考えられる。

6.3 学習者の主体的な工夫

①受講のための環境の整備

回答者は全員、取材時点でPCとWi-Fi環境が整備されていた。

受講環境の工夫では、部屋の家具などの配置や自分の受講場所を変更したり、もともとある物を活用するという方法での自分なりの環境構築が見られた。また、自身のモチベーション維持や、より快適に授業を受けやすくなるための工夫も数多く見られた。

②気持ちの切り替え

対面授業の場合は通学自体が気持ちの切り替えになりうるが、オンライン授業では家で受講しており、日常生活と受講時の気持ちが切り替えづらい。そのため、多くの学生が、それぞれの方法で受講前に決まった行動をすることで気持ちを切り替えていた。

7 今後の展望

今まで経験したことのないオンライン授業という状況下で、大学生がどのように自らの学習環境をデザインしているかを学習者の目線から調査した。その中で、オンライン化によって懸念されていたような授業の理解

度の低下は必ずしも生じないが、学習者間のコミュニケーションが減少することで、間接的に受講へのモチベーションに大きな影響を与えていることが明らかになった。

また、各学生が独自に試行錯誤しながら授業を受けやすいように自分の学習環境を作り出していることが示された。

今回の全国的なオンライン授業導入の中で、教員や大学側も、学生からのフィードバックを積極的に求めて授業に反映させようとしてきた。アンケートに基づいて課題量が調整されたり、グループワーク上の課題を認識して授業のやり方を変更したりという対応を今回のインタビューの中でも聞き取ることができた。

しかし、今回のような学習者自身の観点からの学習への知見は、それらを明らかにすることで教員や大学側がどのように学生をサポートしていくのが効果的かを考える上で、新たな示唆を与えてくれるものとする。

最後に本研究で残された課題として、Covid-19の感染拡大の状況の中で対面取材がほとんど実施できず、多くの取材をオンラインで行ったことが挙げられる。やむを得ない状況ではあったが、対面で音声や画像以外の非言語的な手がかりも得た上で取材を行えば、さらに掘り下げた内容が聞けたかもしれない。

また今回の研究から、同じオンライン授業という形態に対しても、その評価や対処方法に学部や学年などによって大きな差が見られることが明らかになった。より大規模な調査によって、今回の調査ではあまり触れることができなかった学部や学年による違い、大学の対応による違いなども要因として取り込むことができれば、分析を深めることができるだろう。

最後に今回の取材から今後のオンライン授業への提言として2点挙げておきたい。

一点目は授業の双方向性、特に質問への即時的な対応の重要性である。学生の積極的な参加と質問を促すためには、多様な通信環境への配慮は必要ではあるものの、なるべくリアルタイムで授業を実施し、授業内での質疑や双方向のやり取りを重視するべきである。

また二点目として、学生同士の交流の場を生み出すことである。特に1年生は、学生同士の交流の場がなく、新たな交友関係を構築することが現在に至るまで難しい状況だと考えられる。友人との関わりは学習のモチベーションにも大きな影響を与えている。そのため、学生自身が交友関係の構築に努めることはもちろん、大学側がLINE、Discord、Slackなどのコミュニケーション・ツールを活用して安心して参加できる学生同士の交流の場を設けることが、学習のモチベーションを維持する上でも必要である。限定的にでも対面の機会が設けられる状況になれば、積極的にこれを活用することが、さら

に期待される。

2020 年の Covid-19 の感染拡大は、必要に迫られて急速にオンライン授業化を推し進める契機となったが、今後、感染症対策が進んで対面授業が可能になった後にも、オンライン授業に対する需要は依然として続くことが予想される。そのためにも一過的な対応だけでなく、オンライン授業が学生の学びにとってよりよいツールになることを期待したい。

謝辞

本研究を進めるに当たり、インタビューにご協力を頂いた皆様に心より御礼申し上げます。

注

- (注 1) 内閣府 新型コロナウイルス感染症の影響下における 生活意識・行動の変化に関する調査
<https://www5.cao.go.jp/keizai2/manzoku/pdf/shiryo2.pdf> (最終確認日：2020.12.1)
- (注 2) 谷口忠大 オンライン化が進む中でのインフォーマルコミュニケーションのあり方とは
<http://www.ritsumei.ac.jp/features/newstreams/interviewee9/> (最終確認日：2020.12.10)
- (注 3) 志村智彦 オンライン zoom 研修を成功させるための 17 の視点～2 日間の研修を zoom でやり切って見えてきたこと～
<https://note.com/kokolozashi/n/n372401d28b59> (最終確認日：2020.12.10)

引用文献

- レイヴ・ウェンガー (1991=1993)
『状況に埋め込まれた学習——正統的周辺参加』
(佐伯胖訳) 産業図書, 1993. / Jean Lave, Etienne Wenger. (1991) *Situated learning : legitimate peripheral participation*. Cambridge University Press
- 柳町智治 (2006)
「教室における知識・情報のネットワーク - 入門フランス語クラスでの調査から -」 上野直樹, ソーヤーりえこ編著『文化と状況的学習 実践, 言語, 人工物へのアクセスのデザイン』凡人社, p.154-167
- 山内祐平・山田政寛編著 (2016)
『インフォーマル学習』ミネルヴァ書房